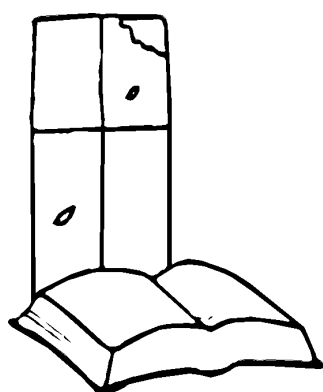


○四年の十二月四日に一五〇周年のお祝いをしたのです。また今年の十月二一日は、創立者のジュール・シュヴァリエ神父様の帰天一〇〇年になりますので、秋に記念ミサがあるかと思えます。ジュール・シュヴァリエ神父様は、創立当初、色々な困難に直面され、聖マルガリータ・マリア・アラコックが眠っておられるパレ・ル・モニアルに巡礼されました。そこで、あらためてイエスの聖心、溢れる愛を観想され、深い慰めを得られたそうです。聖女の伝記を読みますと、私達も、初金のごミサにあらずかる恵みを、より深く感じられると思えます。

ところで、第二ヴァチカン会議のあと、内陣の一番前に置かれた木製の祭壇でミサが行われていた時期がありました。その祭壇には緑の字で「見ずして信じる者は幸いなり」と書かれてありました。遠くから眺める背面ミサではなく、食卓を囲むというミサ本来の意味を取り戻そうという試みであったと思われます。現在ではローマ・ミサ典礼書の新総則第五章に、「固定祭壇・・・は自然石を用

いるものとする」とあり、木製の可動祭壇は三階に移され、大理石製の固定祭壇でミサが行われています。ペトロの第一の手紙二章では「主は、・・・尊い生きた石なのです」、またエフエソへの手紙二章でも「そのかなめ石はキリスト・イエスご自身であり・・・」とありますように、祭壇に石を用いるのはキリスト・イエスをはつきりと表すためなのです。

この項を書くにあたって、三階にある祭壇を確かめましたら、聖トマの聖句が刻まれた祭壇ではなかったのです。あの懐かしい祭壇はどこに行っただけでしょうか。



芸術

『布花と出会う』

～アンナ 成田 頼子さん～

10年以上前に布花作りと出会って、その魅力の虜となったアンナ成田頼子さんが初めて完成させた作品はマリーゴールドでした。それ以来、熱心にコサージュ教室で布花の創作を始められ、今では三越の「K・マサコ」で作品が販売される程の腕前となっております。布花のコサージュは、いわゆる大量生産の造花と違って、デッサン、布選び、染色から始まる、一つ一つ手作りの、まさに創造的な芸術作品なのです。

真っ白な布から、型を切って、染め、コテをあて、また指先で表情を作っていくうちに、花とか果物などの作品が出来ていく、その感動、楽しさは格別なものがあると言われます。もともと生け花をされていた経験もあって、布花作りを始めてからは、さらに対象物を丁寧に観察するようになり、色々な物事から学ぶこと、再発見することが多くなったそうです。

創造的な、個性が要求される布花作りは、技術だけではない、趣味の世界とは違うものだということを感じました。視野が広がり、人間的にも成長してきたと、喜びを語られる成田さんに感じたものの正体は、万物の創造主である神様への畏敬、信仰といったものなのではないでしょうか。

(文責 後藤明憲)

